

潜伏キリシタン集落の歴史的背景を考えてみましょう (その3)

ー現代の「キリシタンの里」ー

ここからは歴史エッセイ風に書かせてもらいます。外海地区下黒崎にお住いの松川隆治先生(元かくれ信徒の仏教徒)をお訪ねして、潜伏キリシタン・かくれキリシタンを学習したのが、私の「キリシタンの里」研究の始まりでした。これについては拙著をご参照ください。また、学問的先駆的研究書である田北耕也^{たぎた}『昭和時代の潜伏キリシタン』には「母郷黒崎地方」と記されていますが、これは田北先生が最初に「潜伏キリシタン」を発見した集落という意味合いもあるように思われます。

さて、黒崎にはキリシタン神社として著名な枯松神社^{かれまつ}があります。以前カトリック・「かくれ」信徒・仏教徒(元かくれ信徒)共催の行事が行われていました。しかし、12の世界文化遺産構成資産に黒崎集落は入っていません。国指定史跡・国の重要文化財・重要文化的景観といった国指定の文化財がないので、候補にはなったようですが、選ばれませんでした。その枯松神社の傍に新しく建立された墓地があって墓標など拝見すると、仏教の戒名とキリシタンの洗礼名、その両方が刻されている石塔があり、中には長崎の影響で小さな「土神」^{どじん}もありました。仏教・キリスト教・道教が混合している珍しいお墓です。

次に、五島の「キリシタンの里」に行ってみましょう。上五島北魚目^{あかばえ}に赤波江という小さな集落があって、夕日に映える赤い屋根の教会が目立っています。かつては30軒くらいあったそうですが、2015年の『新上五島町電話帳』では6軒(人)記載され、2019年に教会を拝観したときは5人の赤波江さんが記してありました。ついでに2015年の長崎版電話帳を見ると赤波江さんが10人おられます。またネットで「赤波江」を入力すると、司祭になられた方もおられました。

周知のとおり、日本国民の多くは明治維新後に新政府の法令で名字(苗字)を名乗るようになりました。この集落の人々は、全戸が「赤波江」を名乗ったようです。同じ北魚目の大水集落も十数軒みんな大水姓で、大水教会を拠り所に生活しておられます。地名のとおり滝のような急傾斜の地面はそのまま海へ、また時に激しい冬の季節風が吹き、生活環境は非常に厳しそうです。新上五島町の電話帳(2015年)には大水が属する曾根郷に21人の大水さんが記され、近隣地区に19人の方が載っていました。五島市の電話帳(2015年)に大水姓・赤波江姓の記載は一人もありません。

すでにNTTからの電話帳配布はなくなりましたが、県立図書館には保存してありま

すので活用してください。何となく五島市の電話帳を眺めていたら、葛島さんが47人載っていました。奈留島の北に葛^{かずら}島という小さな島があります。幕末期に外海からの移住者が集落を営み、カトリック改宗後は教会が建てられ、第二次大戦後は人口も250人を超えていましたが、高度成長期の1973年に100人ほどが奈留本島に集団移転したそうです。いわばキリシタンの里がそっくり移転し、現在に至っています。

いろいろ気になることが浮かぶ奈留島について田北先生は、「キリシタンの密度も数も五島列島最大の島」で、第2次大戦後1951年の人口概数をみると半数以上の4,500人が「かくれ」信仰を続けていたと著書に書かれています。このときのカトリック信徒は1,200人でした。

今後、多くの五島への移住者を出した旧神浦村と奈留島の関係を探ってみたいと思っています。

[長崎県長崎学アドバイザー 本馬 貞夫]



赤波江教会



枯松神社祭



赤波江集落



大水集落